

# 「道徳の教科化」の問題と現場のとりくみ

林 英 樹

## ◇ 「道徳」の時間が「非道徳」の時間に

四月三日のNHK「クローズアップ現代」は、「道徳」が正式な教科に密着・先生は？ 子どもは？というタイトルで放映され、「道徳の教科化」（以下、「教科化」）の課題を浮き彫りにしていました。簡単にその内容を紹介します。

担任の先生はテーマに「家族愛」を選び、『お母さんのせいきゅう書』という教材を選んで授業をすすめました。母親の無償の愛を通じて、子どもたちに「家族愛」について考えさせることにしたのです。

## 『お母さんのせいきゅう書』の要約

ある朝、たかしが母親に「お使い代、お掃除代、お留守番代、合計五〇〇円」と書いた一枚の請求書を渡す。昼時、母親は五〇〇円と一緒に請求書を渡すのだが、そこに書かれていたのは「病気をしたときの看病代」「洋服や靴」「おもちゃ代」など、すべて〇円。それを見たたかしの目には涙があふれる。

この話を読んで、ほとんどの子どもは「母親が子どもにお金を要求しないのは当たり前」といった意見を發表します。ただ、ひとりの男の子が母親の気持ちについて「子どももいいな。えらいことするとお金がもらえるから、私も子どもがいいな」と発言します。

すると、生徒たちからは大きな笑いが起つてしまいました。これを聞いた担任の先生は「お金がほしい、いいなと思うんだつたら…」と返したことで、まわりの子どもが「一円、一〇円、一〇〇円でも書いて渡せばいい」と発言しました。男の子はそれ以上声をあげず、流れる涙を悟られないように拭き続けていました。

授業後に取材者がその男の子に答える理由を尋ねると、共働きで忙しく家事をこなす母を思い、「お母さんは家事とかをしても、お金をいつももらえないから、『お金をもらいたい』って気持ちがあつてこれを書いた…」と答えていました。

授業の中で男の子の思いを広げたら、多様な価値観が共有されたはずですが、少なくとも、男の子は同調圧力に押しつぶされて涙することはなかったはず。

文科省は「特定の価値観を押しつけない」とし

ています。しかし、教科として扱う以上、「こうするべきだ」という一つの価値観を「答え」に位置づけ、単位時間の中でそこに導く指導をする必要があるとされています。

「道徳」を扱う時間の中で、番組のような「非道徳」な行為がくり返されてしまう危険性があります。

## ◇ 「教科化」は憲法違反です

「教科化」は、戦争を後押しする国民づくりを担った「修身」への深い反省と、価値観の押し付けや内面の自由を縛ることへの強い反発から、戦後一貫して「教科化」は見送られてきました。しかし、国は二〇一一年におきた大津いじめ自殺事件などを理由に、「思いやり」や『やさしさ』、『規範意識』を教えることは重要だ」として、「教科化」を決定しました。「教科化」には大きなねらいがあります。

- ① 「道徳」が教科化されること… 国家が子どもの「心」に踏み込む権限を得る。
- ② 検定教科書を使用すること… 国家に有益な「価値」を選び、子どもに押しつける権限を得る。
- ③ 「評価」を行うこと… 国家が子どもの「心」を評価する権限を得る。

タレントの北野武さんは著書の中で、「誰かに押しつけられた道徳に、唯々諾々と従うとバカを見る。それはもう、すでに昔の人が経験済みのこ

とだ」と「教科化」を痛烈に批判しています。

何を「善」とするか、いかなる生き方を「よい生き方」とするかは、一人ひとり異なるものです。憲法及び子どもの権利条約は、一人ひとりの価値観や生き方が異なることを当然の前提として、自らの判断で選び取るものとし、そこに国家が介入することを禁じています。

「教科化」により、国家が公教育の名のもとに、「節度、節制」、「親切、思いやり」、「国や郷土を愛する態度」など、一定の価値観を公定します。それを国民が身につけるべき「道徳」として教科書に書き込み、教師が子どもに指導することになります。子どもは教科書に書かれていることは「正しいこと」として受け止め、無批判に受け入れてしまう危険性があります。

また、評価についても、憲法及び子どもの権利条約からも、「子どもの心や価値観を評価の対象としてはならない」ことは明らかです。

文科省がいくら「児童（生徒）の良い点や進歩の状況を積極的に評価する」としても、「良い点」や「進歩」の基準は国家が選定した特定の「価値」にもとづくものとなります。

「教科化」は、子どもに特定の価値観を強制する危険があり、憲法及び子どもの権利条約が保障する権利を侵害するおそれがあります。

#### ◇ 国家のエージェントにならないために

文科省は「考え、議論する道徳」への転換を掲げ、子どもたちが話し合う場面を取り入れるよう

求めています。しかし、教師が無批判に授業をすすめれば、冒頭で紹介した番組のように、学級集団で国家が選定した「価値」と異なる生活習慣や価値観を持つ子どもたちが排除される危険性や、学級が子どもたちにとってありのままの自分であることが許されない場へと変質してしまう恐れがあります。

よって、批判的な視点で教科書を分析し、「国家道徳」のねらいをかわし、民主主義社会の形成者としての道徳性を育むとくみが大切になります。

#### △文科省の「考え、議論する道徳」を実現するために▽

教科書の教材を最後まで読んで話し合ったり、巻末に用意されている設問に従って授業をすすめる時、子どもたちは特定の「価値」を導き出すための議論をしたり、「答え」が透けて見えるために議論が成立しない状況となることが予想されます。

子どもたちが自由な視点で発言し、多様な価値観を共有していくためには、いくつかの工夫が必要になります。「分断読み」や「中断読み」はその例となります。

・ 分断読み：場面ごとに発問し、意見交流しながら授業をすすめる、最後まで読んでまとめる。

・ 中断読み：あらかじめ中断する場面を決め、最後まで読まずに意見交流をして終わる。

#### △異なった視点で教材を分析する▽

例えば、問題を子どもの「思いやり」や「やさしさ」で解決させようとする教材では、「公平・公正」という視点で議論をすすめます。貧困や格差から生じる問題を子どもたちの「心のありよう」の問題として処理すれば、社会・政治の責任がすべて押し隠されてしまうことになります。「公平・公正」という視点から社会を批判的にとらえ直し、そのしくみを変革させようとする声が子どもから必ず発せられるはずですよ。

#### △教科学習や総合学習、諸活動を充実させる▽

教科としての「道徳」には、科学的な裏付けがありません。国語や数学などの教科の学びは、その内容への批判的検証がくり返され、人類の文化的価値が内包されています。また、総合学習や日常のさまざまなとくみは、権利を学んだり「自分らしく、よりよく生きる」ための実践が用意されています。学校教育には、民主主義社会の形成者としての道徳性を育むとくみが内包されているのです。

「教科化」に対しては、歴史的な事実と子どもたちの権利を守る視点から対策が必要となることは既述のとおりです。しかし、最も大切なことは、日々の教育実践を充実していくことです。

林 英樹（はやし ひでき）

中学校教師・北海道教職員組合の学校改革・教育課程自主編成推進委員会道徳部会所属。